

## 『シュラウェあるいは死者の旅路』に関する一考察 —メキシコ西部の民間伝承に見る世界観—

吉田 晃章

### 序

メキシコ北中部は大地形から見ると、西シエラ・マドレ (Sierra Madre Occidental) と東シエラ・マドレ (Sierra Madre Oriental) の二つの山脈とそれに挟まれた中央高原から構成される。ウイチョール (Huichol)<sup>1</sup>の居住地域は、西シエラ・マドレの一角で、現在のハリスコ州 (Estado de Jalisco) とナジャリ州 (Estado de Nayarit) の州境に位置している。おもに西シエラ・マドレに属すウイチョール山脈 (Sierra Huichol) にウイチョールの集落のほとんどが集中している。厳しい地形は、ウイチョールの居住区に人をよせつけず、古くからの生活習慣、価値体系が継承されてきた。しかし、このウイチョールでさえも、メシーカ (Mexica) などの他の先住民族と同様、征服後はキリスト教化されていったが、18世紀後半にウイチョールの居住地で活動していたフランシスコ会派の宣教師が立ち去ると、再び、ウイチョール独自の世界観が強く認識されるようになり、キリスト教が古来の宗教に取り込まれた独特の観念体系が形成されていった<sup>2</sup>。ウイチョール独自の世界観、つまり、征服以前のメキシコ西部の世界観とはいっていいどのようなものであったのだろうか。本稿では、『シュラウェあるいは死者の旅路 (Xurawe o la Ruta de los Muertos)』<sup>3</sup>という口承伝承を題材に西部地域の世界観を考察する。

この伝承では、シュラウェの死後、彼がどのような旅をするかが描かれている。シュラウェとは、二人の子供の父であるウイチョールの男性である。物語は口承伝承のため、ウイチョールの村ごとに、あるいは語り手によって様々なバリエーションが存在するが、話しの根幹となる部分は一定している。本稿で底本として用いたのは、それらの異伝をシルビア・レアル (Silvia Leal Carretero) がまとめ編纂したものである。なお、レアルのテキストはウイチョールの言語ではなく、スペイン語で記されている。

### 1. 死者の旅路

伝承は基本的に3部から構成されている。第1部は15場面、第2部は12場面、第3部は8場面からなる。死後の世界観を知るためにには、特に第1部と第2部が重要であるが、まず物語全体の概要を述べ、その後簡潔な形で解釈の可能性を示したい（以下の記述において、丸付き数字は、各場面を表している。物語全体の構成は、表1として示した）。

第1部は、①主人公の家族関係や背景が語られ、②シュラウェが病床に横たわり、家族に囲まれている場面から始まる。そこに神々の使いであるロバビーダス (robavidas: 「魂を盗む者」の意) が登場し、シュラウェが死ぬ運命にあることを告げる。ロバビーダスは、シュラウェの手にロープをかけて魂を引き起こし、身体から抜き取り、連れ去るのである<sup>4</sup>。ウイチョールの人々は太陽あるいは世界は四方の蠟燭によって支えられていると考えている。そのためシュラウェはロバビーダスと一緒に、この蠟燭を守る基本四方位の神々をはじめとする諸神を尋ね

て回り、神々へ延命を懇願する。自分がなぜ死ななくてはならないのか、また生き長らえることはできないのかと質問をするのである。シュラウェの死の理由は、③太陽神ウェエシイクア (Weexiikia)、④我々の祖父、火の神タテバリ (Tatewari) を訪問したのち、第⑤場面で告げられる<sup>5</sup>。それはトウモロコシの女神ニウェツイカ (Niwetsika) に供儀を怠ったからであった。女神は収穫の後、動物を捧げるよう命じたが、シュラウェはこれに従わなかつたのである。神々は作物を与えることで人々への約束を果たしていると考えられているため、人間も神々との約束を果たさなければならない。しかしシュラウェは約束を果たさなかつたので、神々は忠告として彼を病気にからせるよう、ロバビーダスを遣わした。三度の忠告にもかかわらず、シュラウェは供儀を捧げず約束を果たさなかつた。そこで、トウモロコシの女神は西の闇の支配者、東のタナナマ (Tananama)、北のアウシャテマイ神 (Hauxatemai)、南のナカウェ神 (Nakawe)、中央のツアムラウイ神 (Tsamirawi) とウトゥタウイ神 ('Ututawi) と相談し、ロバビーダスに彼の命を奪うよう命令したのだった。このように主人公の死の理由が語られた後は、延命を請いながらシュラウェは基本四方位の神々のもとを巡ることになる。⑥南のチャパラ湖 (Lago de Chapala) 上の島に住むナカウェ、⑦西の太平洋のアラマラ神 (Haramara)、⑧中央のツアムラウイ、⑨シカの主人であるウトゥタウイ、⑩北のアウシャテマイのところを順にまわる。そして、太平洋岸のサン・blas (San Blas) から、北へ移動し東の空にある命の芽 (生命の枝) を見に行くように勧められ、聖地であるサン・ルイス・ポトシ州 (Estado de San Luis Potosí) のウイリクータ (Wirikuta) へ向かうことになる。⑪ウイリクータへ向かう途中、タナナマ神が奉られているタテイキエ村 (Tateikie) の教会で、タナナマ神にウイリクータから天界パリテクア (Paritekia) に上るように告げられる。神の言葉どおり、シュラウェとロバビーダスは⑫神々が住むと信じられている東の聖地ウイリクータから最後の審判が下されるパリテクアへと上っていくのである<sup>6</sup>。

そこには、タナナマ神がおり、ロバビーダスとシュラウェを待ち受けている。この神は二神で一対であり、タナナマは二神を一度に指す言葉である。タナナマを構成する一対の神は我々の父、タタタ (Tatata) と、我々の母、タナナ (Tanana) であると言われている。この二神は、物語の中では、洪水の後スペインから渡來した神々として語られている。タナナマ神は最後の審判でシュラウェを裁き、その直後にシュラウェの生命の枝を見て枯れていますのを確認し、主人公の地獄行きを決定する。罪を犯していないものは、パリテクアに留まることができるが、罪を犯したものは地獄へ向かうことになるというのが定めであった<sup>7</sup>。東の空で審判を受けた後、⑬⑭シュラウェとロバビーダスは西へ旅をし<sup>8</sup>、⑮地獄の入り口テテユアウェクア (Teteyuawekia) に向かう。そこで、シュラウェは闇の世界への案内役である闇の支配者に引き渡される。

つづく第2部では、⑯光の世界と闇の世界の境界である扉を超え、様々な罰を受けながら最下層の死者の世界へと降りていく行程が語られる。闇の領域に入ると、光の世界つまり現実の世界では主人公の体が死んでしまう。闇の世界に入った彼も、肌の色や着ている服の色はなくなり、暗い色に変化したと語られている。続く場面⑰では、生前に犯した罪で様々な罰を受ける模様が語られる。まず、焚き火でたかれた五つの釜湯に漬からなければならない。このとき、

生前洗礼親になっていれば、その子どもたちが現れて助けてくれたり、勞わったりしてくれるという<sup>9</sup>。つづいて、⑯生前水を粗末にしたという罪で、虫でいっぱいの汚い水を飲まされたり、⑰木をむやみに傷つけた罪で木に縛られ、木の化け物によって枝で首をしめられ、窒息し、気を失う。さらに、⑱ある動物を虐待した罪で、崖の上から岩を落とされ下敷きとなりつぶされる。また⑲ウイチョールの間では、石は祖先が姿を変えたものであり、生きていると考えられている。そのために、勝手に石を動かしてはならないのだが、シュラウェはその決まりを破った。したがって、すべての石を元のところに戻さなければならないという罰を受けることになる<sup>10</sup>。

その後、⑳生前犯した性的な罪によって、ナレマ (Narema) あるいはクバム (Kuwamu) と呼ばれる、人間と神々の仲介者の存在に性的な罰を受ける。この存在は、男女いずれかの性をもって現れる両義的存在であり、クバムはナレマが男性の姿をしたときの呼び名である。ナレマは大人の性を目覚めさせる存在であるとも言われている。シュラウェは、ナレマの白熱した陰部へと呑み込まれ、気を失う<sup>11</sup>。さらに次の場面㉑では、ウイチョール以外の女性との関係が罰せられる。ここで、他部族あるいは他人種の女性は、動物の形であらわれ、シュラウェに制裁を加える。このように性的な行為に関する罪でも、肉体的な罰を受ける<sup>12</sup>。この後、㉒生前動物を虐待した罪で罰を受けるが、どうにか最後に㉓熱湯の川を犬に渡してもらい、最終地点ネイラタ (Neirata) にたどり着く<sup>13</sup>。㉔川を渡ったネイラタの入り口にはサラーテ (salate: イチジク) の木があり、死者たちが腹をすかせ、集まっている。闇の支配者はシュラウェに、関係を持った女性の数だけ、木に向かって石を投げるように命じる。そこでシュラウェは、イチジクの実に向かって石を投げた。実が落ちると、死者たちが群がり、取りあつた。死者たちはシュラウェに御礼を言ったが、シュラウェの分はなくなってしまったので、腹をすかせたシュラウェは悲しむことになる。残りの石は、木の横にある石の山のところに置いていくようにとロバビーダスに指示される。この石は、ここを通る死者たちが、生前関係を持った相手の性器を表すものであると物語の中で説明されている<sup>14</sup>。

最後の場所である㉕ネイラタでは、死者たちはみな、それぞれ祭りをしている。焚き火を囲み、死者たちが食器などを踏みつけて踊り、マラアカメ (Mara'akame: 祈祷師) は中央で滑稽なほど汗をかいて祈祷している。死者たちの中には、飲み物を撒き散らす者もいる。彼らは止まることなく歌い踊り続けなければならない。生前に怠けたものは、楽器を弾きつづけなければならない。人殺しをしたものは、拷問を受ける。ウイチョールの間では、5人まで女性と関係を持つことが許容されるが、愛人を5人以上もつた者でも、生前しっかりと祭りに参加していれば、自分の罰の分だけ踊り、あとは地獄を見渡せるところで休み、清潔な食べ物を食べたり飲んだりできるのだった。ネイラタの管理人はシュラウェの足の裏や手のひらを見て、シュラウェがまじめに祭りに参加して踊ったりバイオリンを弾いたりしていたかどうかを調べたが、その痕跡が見られなかつたので、シュラウェは踊りつづけることになつてしまう。持っていた物、着ていた服を取られ、彼は踊りに加えられた。そして、その瞬間から彼は時間の感覚を失い、この場に留まり踊りつづけることになるのである<sup>15</sup>。

第3部は、㉖死後5日目に行なわれる葬儀で、夜中家族のものが集まり、マラアカメが祈祷

をするところから始まる。そして、<sup>29</sup> シュラウェが死んだ理由を確かめるために、マラアカメは神と人間の仲介役であるカウユマリエ（Kauyumarie）の力を借りる。<sup>30</sup><sup>31</sup><sup>32</sup> 頼まれたカウユマリエはシュラウェを探しに神々のところを転々とする。そして、<sup>33</sup> 地獄で彼を見つけ、<sup>34</sup> 閻の地方から連れ出し、<sup>35</sup> 家族に最後の挨拶をさせるために連れ帰る。こうして、別れを済ませると、再び地獄へ戻り、帰ってくることはないと記されて、この物語は終わる<sup>16</sup>。

## 2. 物語から読み取れるウィチョール世界の構成

第1部について概説したように、シュラウェは、自分の村を出てウイリクータからパリテクアに上り、最後の審判を受けるときまで、ロバビーダスとともに世界を旅する。その世界とは、四方で太陽を支える蠟燭を守る基本四方位の神々の世界である。この光の世界を回るときは、実在の地名や場所が語られることからも、神々の世界はウィチョールの現実の世界と対応するものと考えられる。そして世界がどのように神々によって構成されているかが語られる。つまり、延命を懇願する旅の意味は、水平的に広がる世界、換言すれば彼らの宗教が規定する世界を死ぬ前に再確認することであろう。

また、第1部の旅は神々のところを訪ね歩き、神々によって主人公が何者であるかが聞いただされる旅でもあった。人間はウィチョールの神々が創造したものであるが、自分がどの神によって創り出されたのか、どの神の子供なのか、出自を明らかにし、神々への帰属意識を明確にしなければならない。個人と神々との関係、言い換えれば個人のアイデンティティーを確認することの重要性が示されていると言えよう。

神々の約束というテーマも、どの神によって創られた人間で、どの神に供儀を捧げるべきかということを問い合わせている。場面④では、祖父タテバリがシュラウェの子供の命は、まだ自分の庇護の下にあると言い、あるいはシュラウェの命は危険な状態にあると述べる。場面⑤でもシュラウェが生れたときからニウエツイカの庇護の下にあり、この女神に従属していることが確認されている。この神に従属する主人公は、供儀を捧げなければならないが、怠けてその約束を果たさない。また主人公を地上に送ったタナナマとの約束も果たさなかったと語られ、シュラウェはタナナマ神によって創造された者であることが明らかにされている。

第1部の最後の場面で登場するタナナマ神は、キリスト教の布教とともにたらされたイエス・キリストと聖母マリアそのものと考えることもできるが、征服以前から存在する彼ら特有の神々がキリストやマリアと融合したものと解釈するのが自然であろう。伝承では、スペインからやってきたと記述されてはいるものの、その信憑性には疑問が残る。なぜなら、中央高原のアステカ（Azteca）の神々の中にも、これらに対応すると思われる神が存在するからである。その神は、オメテオトル（Ometeotl）あるいはオメテクートリ（Ometecuhtli）と呼ばれ、善悪、男女、昼夜など相反する二つの価値をあわせもつ二元性の神であるとともに、神々を誕生させた創造神であると語られている<sup>17</sup>。この神の配偶者、または一変化はオメシワトル（Omechihuatl）と呼ばれており、オメテオトルと男女の対をなす神とされている。タナナマも男女で一対と考えられ、二元性を示していることから、先スペイン期の神オメテオトルとの関連性も捨象できない。一方、物語の中では、パリテクアには長方形の神殿があり、その中にタナナマ神がいる

という記述もあるので、キリスト教の強い影響の下に、教会の中にある聖母とイエスのイメージがその原型のひとつとなっていることも想像に難くない。いずれにせよ、異なった文明の接触による複合的な宗教状況を表すひとつの例として考えなければならないだろう。

タナナマによるシュラウェの審判においては、生命の枝が注目される。審判が下された後に、この生命の枝で裁かれた人物の命が尽きるかどうかが確認される。このような行為はキリスト教の最後の審判には存在しない。つまり、キリスト教の神によって運命が決定されるのではなく、生命の枝によって生死が判定されると考えるべきであろう。また、ここでは現実の世界における生が、神々の世界においてもあたかもその分身であるかのように存在することを示している。つまり、人々の生活する次元での生は、神々が住む次元でも同じように存在しているのである。しかしながら、パリテクアの生命の枝で見ることのできる生は、予見的なものでしかない。なぜなら、生命の芽が天界ではすでに枯れているにもかかわらず、現実の世界ではシュラウェは死なず、肉体が死ぬのは、テテュアウェクアで闇への扉をくぐった瞬間だからである。

第2部では、生前犯した罪の罰を受けながら、最下層の死者の世界へ降りて行く旅が語られる。ネイラタまで一貫して語られるテーマは、自然を大切にしなかったり、あるいは神の恵みを粗末にすると罰があたるという因果応報である。

これに対してはまず、肉体的な責め苦が続くことになる。釜湯に漬かる場面⑯では、洗礼というキリスト教的テーマが見られる。言うまでもなく、洗礼は征服以後、キリスト教徒によつてもたらされたものである。洗礼親になることは、ウイチョールにおいても社会的な責任を果たしていることの証となるとともに、救済の理由ともなる。これ以降、場面⑰から㉑までは、主人公の生前の行いに対する応報がテーマとなっている。

場面㉑からは、性に関する罪が、重要なテーマとして記述される。まず、ナレマが生前の愛人を装って、主人公を罰する。さらに場面㉒では、ウイチョール以外の女性との関係が罰せられ、ネイラタの一つ手前の場面㉓で、性へのこだわりを捨てるために、性器を象徴した石が捨てられる。この場面では、性からの離脱を具体的な行為で示している。死者の世界では性への関心が捨てられるわけであり、言い換えれば自己の生前のアイデンティティーを構成する要素の一つが失われることになる。第1部では先に述べたように神々に対する自己の帰属を確かめることで、アイデンティティーの確認が行われていたが、第2部ではアイデンティティーあるいは自己を喪失していく過程が描かれている。ネイラタでは、持っているものや着ている服を剥ぎ取られ、他の死者と区別がつかないようになり、時間の感覚を失う。また、シュラウェは幸いにしてそうはならなかったが、洗礼親になっていなければ、場面⑯の釜湯から出ると蚊のように痩せ細り、キツネやフクロウの言葉を話すようになり、それ以降神々と会話ができなくなるとも述べられている。自分は人間であるという認識や神と同じ言葉を話すという意識をもった存在が、言語を喪失した、いわば野生へと変わるこの転換は、徹底的な自己の喪失以上何者でもあるまい。

第1部に登場するキリスト教の神をはじめ、伝承内には随所にキリスト教の影響が見受けられる。しかし、この伝承はキリスト教が入ってきてから、その影響下にはじめて作られたものなのだろうか。すでに述べたように、最後の審判という大切な場面でも、神々は審判を下した

後に、裁かれた人物の命が尽きるかどうかを生命の枝を用いて確かめる。このことだけでも、キリスト教と土着の宗教的観念が混交していることをうかがわせる。では先スペイン期に固有な世界観とはどのようなものであったと認めることができるのだろうか。この問題を考察するために、先スペイン期の中央高原の死にまつわる世界観を見ていくことにしたい。

### 3. 中央高原との類似

征服以前、中央高原のアステカでもウイチョールと同じように、死者の旅について様々なことが語られていた。アステカの死後の世界は三つないし四つに分かれていると考えられている。その三つとは、トラロカン（Tlalocan）と昼の太陽の家トナティウイチャン（Tonatiuhichan）そしてミクトラン（Mictlan）であり<sup>18</sup>、四つの場合はこれにトウモロコシの楽園シンカルコ（Cincalco）が加わる<sup>19</sup>。トラロカンとは、雨の神トラロック（Tlaloc）が支配する楽園である。水が関係する病で亡くなった者はトラロカンへ行くことができる<sup>20</sup>。太陽の家トナティウイチャンは、戦士、生け贋に捧げられた者が行く場所であった<sup>21</sup>。また出産で死んだ女性も戦士と同様に称えられ、西の楽園（トウモロコシの楽園）へ行き、シワピルテイン（Ciuapipiltin）と呼ばれる女神になる。ミクトランとは北の果てにある地下界のことである<sup>22</sup>。ミクトランへ行く者は荼毘に付される。ここへ向かう死者の魂は、取り立てて特別のことも行わず、ありきたりの死を迎えた人々のもので、そこへ到着するには4年間かかるとされている。この旅の最終地はチコナウミクトラン（Chiconaumictlan）と呼ばれており、ミクトランテクートリ（Mictlantecutli）、別名ツォンテモック（Tzontemoc）とミクテカシワトル（Mictecaciuatl）が支配していた<sup>23</sup>。死者はここに到達するのに5年を要するが、到着した時、魂は消滅すると考えられていたため、死者に対する儀礼も5年目以降は行われなかったと言う<sup>24</sup>。

ミクトランへの旅は、アステカの死者の旅として、いくつかのバリエーションをもって語られる。以下、サアグン（Sahagún）のフロレンティン・コデックス（Florentine Codex）、ヴァティカヌス・コデックス（Codice Vaticanus）<sup>25</sup>に依拠して、ミクトランへの行程を簡潔に記述したい。フロレンティン・コデックスでは、死者は①二つの山が迫っている所を抜け、②ヘビに見張られている道を通り、③緑のトカゲのいるところを通過する。それから④八つの砂漠と⑤八つの丘を乗り越え、⑥黒曜石のナイフや石、骨が飛び、風の吹くところを抜ける。その後、死者は⑦九つの川を渡り、⑧九つの死者の地へ到達することになっている<sup>26</sup>。ヴァティカヌス・コデックスでも、地上を含めて9番目の地が死者の行きつくところとされている。①地上を出発した死者は、②水の流れるところを渡り、③二つの丘を越え、④黒曜石の丘をのぼり、⑤黒曜石の風が吹くところを通過。次に⑥旗がたなびくところを通り、⑦矢が射られるところを抜け、⑧心臓が食べられるところを通過し、最後に⑨道が左にあるところに到着するのである。まとめて言えば、死んだ者は様々な苦難を受け、垂直に地下界の一番深いところに降りていくというのが、アステカにおける死者の旅の骨子である。

このように、アステカのミクトランへの旅を見ると、ウイチョールの死者の旅路と類似している点が多い。いずれも最後の地へ向かうためには、難所を通過しなければならない。ウイチョールの場合は、生前に犯した罪によって死者が受ける罰が変わってくるという違いが認め

られるが、狭い山道を登ったり、犬の助けを借りて川を渡ったり、動物に罰せられるなど、基本的にアステカと同じ場面や構成要素が見られる。難所を通過し、死者の世界である地下へと向かう垂直的な旅で話が構成されているという点で、両者に構造的な類似を認めることができる。このような観点から考えると、ここで取り上げたウィチョールの民間伝承は、きわめてメソアメリカ的であり、征服以前の世界観をかなりの程度温存していると言えるだろう。

またアステカの世界は13層の天界、9層の地下界からなるとされているが、天界と地下界を数で対置させる考え方も、ウィチョールの世界観に存在している。「死者の旅路」の伝承では、天界はパリテクア以降の闇の入り口、すなわちテテユアウェクアまでの場面を含めると、13箇所になる。地下界はテテユアウェクアを含めずに数え、イチジクの木に石を投げる場面<sup>22</sup>を最後の場面と同じ場所と解釈すれば、11箇所となり、9という数字にはならない。具体的な数に相違があるとはいえ、異なった数によって二つの対立する世界を表すという基本的な構造は保たれている。また、垂直的な世界が、ともに成層的なものとして考えられている意味で、世界観の基本的な類似をうかがわせていると言ってよい。

しかし、このような基本的類似が見られるとはいえ、アステカの死後の旅では、ウィチョールの死者の道のりで語られる、世界の構成とアイデンティティーの確認というテーマは見られない。ここで言う世界とは、世界がどのような神々によって構成され、神々がどのように配置され、どのような役割を担っているのかということであり、またアイデンティティーの確認とは神々と人との関係性を重視し、自分の創造神が誰であるのか、あるいは庇護してくれている神はどの神であるのかという帰属を明確にするようなアイデンティティーの確認である。死後、神々と人々が共生する世界を巡り、自分たちの世界の構成を確認したり、個人がいったい何者であるのかというアイデンティティーを確認することは、メキシコ西部に特有のことのように思われる。

#### 4. ウィチョール独自の世界観

死の直前の旅では、まず南、次いで西に位置する太平洋岸のサン・プラスから、北を通過し、聖地であるサン・ルイス・ポトシ州のウイリクータへ移動する。この西から東への移動、あるいは聖地パリテクアへの旅は、彼らが生前に行うペヨーテ巡礼（La Peregrinación de Peyote）に類似していることもここでは指摘しなければならない<sup>23</sup>。端的に言えば、彼らは生前にも天界への旅を行っているのである。ウィチョールの各集落では、毎年秋に収穫を終えると、パリエツイエ・ネパクヌア（Parietsie Nepakunúa）と呼ばれる巡礼が行われる。無人の地サン・ルイス・ポトシのレアル・デ・カトルセ（Real de Catorce）への彼らの巡礼は、ウィチョールが神々を獲得するための果てしない旅であると言えるが、具体的なルートはグループによって異なっている。ウィチョールの信仰生活にとって重要なウイリクータへの巡礼は、ウィチョールが神々に会うための苦難に満ちた長旅である。現在では巡礼にバスなどを利用するようになったが、以前は43日間かけて往復600km以上も歩かなくてはならなかった。聖地ウイリクータへの旅は巡礼であると同時に、儀礼に使う一年分のペヨーテ（peyote）<sup>24</sup>を探りに行く旅でもある。彼らの儀礼に欠かすことのできないペヨーテとは、サボテンの一種でマスカルリン（mescaline）

を含み、LSDとならぶ向精神薬の一つである<sup>29</sup>。マタ・トーレス (Mata Torres) によると、ペヨーテはシカやトウモロコシと同様、神聖なものとして扱われているという<sup>30</sup>。シカは神であり、シカの足跡であるペヨーテもまた神であると考えられている。そのため、ペヨーテの土地はウィチョールにとって、とりわけ神聖であり、初めて訪れる人は赤いハンカチで顔を隠さなければならぬほどである<sup>31</sup>。ウイリクータは神々の住むところであり、太陽の神が昇るためにやって来たところとされている。神々は様々な場所に存在するが、ことのほか重視されているのがこのウイリクータで、いわば地上の天界として理解される。ウイリクータはウィチョールの居住地区から見ると、東に位置しており、巡礼は東へ向かう旅である。この旅の途中、ウイリクータへ近づくにつれて様々な儀礼が行われ、浄化が行われる<sup>32</sup>。彼らは巡礼を通して、第1部の旅と同じように神々と同じ世界に生き、神々から恩恵を受けていることを確認する。ペヨーテ巡礼は、死後の巡礼とも重ね合わせられるもので、神々の地へ赴く実際的な移動であると考えられる。特にウィチョールの場合、現実に同じ空間内にある聖地への巡礼が、死後の天界への旅と同じ構造をもつかのように語られ、重ね合わされているのが特徴的である。

ウィチョールは、死に際して世界の構成やアイデンティティーを確認することをきわめて重視していると見ることができるが、死と対置される生命の誕生でも、世界認識は同様に重視される。子供が生れると、5年間は神の目あるいはツイクリ (tsikuri)、またはスペイン語でオッホ・デ・ディオス (ojode dios) と呼ばれる神に捧げる奉納具が作られる。これは子供に神の加護があるようにと願いつつ作られるものである。神の目は、十字型に組まれた棒の先端と交点に、毛糸でひし形をつけたものである。子供が生まれ、その子が誕生日を迎えるごとに、菱形を付け加える。両親は5歳までしかそれを作らない。ツイクリは最も重要な神が住んでいた五つの世界を表していると信じられている<sup>33</sup>。これは、死者の旅で述べた基本四方位と中央という五つの点に対応する<sup>34</sup>。ツイクリの起源神話に登場する神々は死者の旅路で語られる蠟燭を守る神々と対応するからである。

最後に、ツイクリの起源神話においては、巡礼についても語られていることに注目しておきたい。それはナリバメ (Nariwame) と呼ばれる泣き虫の少年の話である<sup>35</sup>。この少年の母ラパウイイエメ (Rapawiyeme) は、あまりにナリバメが泣くので、ある日少年を家の外に放り出した。すると少年は、勇敢に困難を克服し、神々の地ウイリクータへ到達した。ナリバメが神の元から戻ると、神々が集まり、東西南北の神聖な場所と中央に神の目を置いたという。すると雨が降りトウモロコシができるようになったというのが、この話の結末である<sup>36</sup>。このように子供が生れた場合も、巡礼が重視され、東西南北と中央を象徴する神の目が作られ、彼ら特有の世界観が強調されているのである。

## 結論

ウィチョールの民間伝承『シュラウェ』には、キリストと聖母マリアにあたる一対の神、タナナマ神による最後の審判などに、キリスト教の影響が確かにあらわれている。しかしながら、伝承には、メキシコ西部で先スペイン期から受け継がれてきたと思われるテーマも見ることができた。その一つは第2部で記述された、苦難を乗り越え、地下世界へ下っていくという垂直

的な旅である。このテーマは中央高原にみられる死後の伝承と構造的に類似しており、征服以前のメソアメリカに共通する世界観を継承していると言える。言い換えれば、メキシコ西部も中央高原的な要素を含んでおり、広い意味でメソアメリカという文化領域に内包され、同じ基本的観念体系を共有していたと考えることができる。

もう一つは、死ぬ直前に、基本四方位の神々を中心に様々な神々の下をまわり、最後にウイリクータから天界パリテクアへ向かうという、物語の第1部で語られる旅のテーマである。これは中央高原の死者の旅では、明確に語られることのなかったテーマであり、メキシコ西部に独特のものと考えられる。この旅は現実の世界に対応する空間の旅であり、世界の構成が再確認される行程として解釈することができよう。この旅は、生きている間に行われるペヨーテ巡礼とも類似した構造をもち、ウイチョールが特に大切にしてきたテーマだと言える。このテーマは、子供の誕生に際し、ツイクリを作ることとも密接な関連を有している。死ぬ前に世界を巡ることは、自己と神々との繋がりを確認し、ウイチョールの神々によって支えられている水平的な広がりをもつ世界を再確認することと考えられる。つまりウイチョールにおいては、誕生から死にいたるまで、自らの世界の構成をつねに確認し続けることが必要とされてきているのである。西部地域に特有に見られるこのテーマは、広大なメソアメリカ地域に存在する文化的共通性が、多様な顕現形態を見せた、その一例であると考えることができよう。本稿で扱った伝承には、征服者の宗教であるキリスト教の影響が見られるとはいえ、征服期以前の世界観の持続性は、それ以上に明確に表れているものと言うことができよう。

\* \* \*

松本亮三先生には、幾度も原稿に目を通していただき、貴重な御教示をたくさん戴いた。最後に御礼申し上げたい。

- 1 彼らは自民族のことをウイシャリカ (Wixárika) と呼んでいる。1980年代初頭、ウイチョール族は人口1万2000人前後であるが(藤田富雄『ラテン・アメリカの宗教』、大明堂、1982、p.112)、現在はそれよりもかなり減少していると思われる。彼らの言語は近隣のコーラ族とともに、ユート・アステカ語族 (Yuto-Azteca) に分類される。二言語ともユート・アステカ・ソノレンセ (Yuto-Azteca-Sonorense) 系の言葉である (Juan Negrín, *Acercamiento Histórico y Subjetivo al Huichol*, Universidad de Guadalajara, 1986, p.13; José Antonio Nava, Hikuri Neirra, en *Corazón de Venado*, ed. Pablo Ortiz Monasterio, Secretaría de Cultura, Gobierno de Jalisco, 1998, p.9.)。
- 2 高山智博、「マヤ・アステカの末裔たち」、「太陽の王国マヤ・アステカの文明」、世界の博物館5 メキシコ国立人類学博物館、増田義郎編、講談社、1978、p.142。
- 3 Silvia Leal Carretero, *Xurawe o la Ruta de los Muertos*, Universidad de Guadalajara, Jalisco, 1992.  
本文中のウイチョールの発音についてであるが、《i》の発音は両唇をつきだした《w》や《u》の音ではなく、両唇を突き出さずに発音する《u》と《i》の中間の音である。《w》は母音《a》が後ろにつづくと《ba》と発音される。他の母音の前に来る場合は、

英語の《w》と同じ発音である。《x》は多くの村ではスペイン語の《rr》として発音されるが、一番古い発音とされるサンタ・カタリーナ方言では英語の《sh》で発音される。《’》は母音が短く切れることを示す記号である (*ibid. pp.21-22.*)。今回は、より古いとされるサンタ・カタリーナ方言の発音でカタカナ表記した。

- 4 *ibid. pp.33-35.*
- 5 *ibid. pp.37-47.*
- 6 *ibid. pp.71-72.*
- 7 *ibid. pp.75-79.*
- 8 ⑬では、シカやトウモロコシ、カボチャの所有者である我々の母、ケウイムカ (Kewimuka) に救いを求めるが、断られる (*ibid. pp.81-83.*)。⑭では5色からなる鉱物の平原マクシェテ (Makuxete) で、ロバビーダスはこの鉱石を原料にシュラウェにフェイスペインティングを施し、たくさんの刺繡で装飾された服を着せる。これはシュラウェが好色者であったことを思い知らせるためである (*ibid. p.85.*)。
- 9 *ibid. pp.95-97.*
- 10 *ibid. pp.95-113.*
- 11 *ibid. pp.115-116.*
- 12 *ibid. pp.119-120.*
- 13 *ibid. pp.127-129.*
- 14 *ibid. pp.131-132.*
- 15 *ibid. pp.135-137.*
- 16 *ibid. pp.141-195.* ⑩、⑪、⑫ではシュラウェが巡った神々の世界を同じように旅をし、テユアウェクアからネイラタまで降りていく行程が語られる。
- 17 Lewis Spence, *The Gods of Mexico*, T. Fisher Unwin Ltd., London, 1923, p.146. オメテオトルは、他にもイパルネモワニ (Ipalnemohuani) やモヨコヤニ (Moyocoyani)、オリンテオトル (Ollintotl) などの別名がある。
- 18 Fray Bernardino de Sahagún, *Florentine Codex*, Book 3, Translated by Arthur J. O. Anderson and Charles E. Dibble, The School of American Research and The University of Utah, 1952, pp. 39-48.
- 19 Warwick Bray, *Everyday Life of the Aztecs*, B. T. Batsford LTD, London and G. P. Putnam's, New York, 1968, pp.69-74.
- 20 Sahagún, op. cit. p. 45.
- 21 *ibid. pp. 47-48.*
- 22 Bray, op. cit. pp.72-73.
- 23 Spence, op. cit. p.331.
- 24 Sahagún, op. cit. pp. 39-43.
- 25 *Codex Vaticanus* 3738, Biblioteca Apostolica Vaticana, Akademische Druck - u. Verlagsgesanstalt, Graz, Austria, 1979, 2r.
- 26 Henry B. Nicholson, Religion in Pre-Hispanic Central Mexico, In *Handbook of Middle American*

- Indians*, Vol.10, University of Texas Press, Austin, 1971, pp.395-446, table 2.
- 27 ペヨーテ巡礼に関しては、Ramón Mata Torres, *Los Peyoteros*, Kerigma S.A., Guadalajara, 1976; *Peregrinación del Peyote*, Edición de La Casa de las Artesanías del Gobierno de Jalisco, 1991などで詳述されている。
- 28 ペヨーテの語源は、ナワトル語のペヨトル (peyotl) である。学名は *Lophophora Williamsii* で、ウイチョール語ではヒクリ (hikuri) とよぶ。
- 29 スタニスラフ・グロフ、クリスティナ・グロフ、「魂の航海術—死と死後の世界—」、イメージの博物誌10、山折哲雄訳、平凡社、1982、p.18.
- 30 Mata Torres, 1991, op. cit. p.80.
- 31 赤はウイチョールのカラーシンボリズムにおいて、東と密接な関係を示す。方位と色の関係については、Ramón Mata Torres, *La Vida de los Huicholes*, Guadalajara 1980a; *El Arte de los Huicholes*, Guadalajara 1980bの各所で触れられている。ウイチョールの空間認識については、吉田晃章、「メキシコ西部の埋葬に見られる方位認識」(1999年度東海大学文学修士号請求論文)、pp.33-36.でも詳しく述べたとおりである。
- 32 処化とともに、神々との契約を果たしていることを示す儀礼を行う。例えば、アグア・エディオンダ (Agua Hedionda: 「汚い水」の意) という場所での、汚い水を大切にする儀礼である (Mata Torres, 1991, op. cit. p.62.)。
- 33 Mata Torres, 1980b, op. cit. pp.5-6.
- 34 西の神タテイ・アラマラ (Tatei Aramara) は、死者の旅の伝承におけるアラマラ神に対応し、北のアウラマナカ (Aurramanaka) は第1部⑩のアウシャマナカ (Hauxamanaka) に対応する。南のラパウイイエメ (Rapawiyeme) は、シャパウイイエメカ (Xapawiyemeka) に対応する。この神はシュラウェの伝承では、ナカウェ神の一形態として説明されている (Leal Carretero, op. cit. p.203.) ので、ラパウイイエメはナカウェであると言えよう。中央は、様々な神々がいるウイチョールの居住地域であり、これも一致する。東の神ウテアリパ (Utearipa) だけが、死者の伝承では登場しないが、上記の三方位と中央の類似から、ツイクリの四方位と中央が、死者の旅に登場する基本四方位と中央に一致すると考えらる。
- 35 マタ・トレスの記述するナリバメは、シルヴィア・レアルのヌアリバメ (Ni'ariwame) に対応する神であると思われる。しかしナリバメは男性で、死者の旅路で登場するヌアリバメは女神で (ibid. pp.45-47.), 性が異なる。
- 36 Mata Torres, 1980b, op. cit. pp.6-8. タテイ・アラマラは西に、ウテアリパは東に、アウラマナカは北に、ラパウイイエメは南に神の目を置いた。他の神々はイラパ (Irrapa) と呼ばれる中央に神の目を置いた。

**表1 『死者の旅路』の概要**  
(左欄の①～⑯は本文中で記述した場面の番号と一致している)

### 第1部 死ぬ寸前のシュラウェが神々を訪ね、最後の懇願をする

	マクシウヤ(Makuxiuya)の農園で
①	コーラ(Cola)という名の祈祷師(マラアカメ)とその妻がこれから語られる主人公シュラウェについて会話をし、物語の背景について述べる場面。
	死の床にあるシュラウェ
②	病床にある主人公シュラウェが、神々の遣いであるロバビーダスに体から魂を抜かれ、連れ出される場面。
	テウパ(Teupa)
③	シュラウェがロバビーダスに付き添われ、テウパという場所で太陽神ウェエシークアに延命を願い出る場面。
	テエカタ(Teekata)
④	テエカタ洞窟で、火の神タテバリに延命を願い出る場面。
	ヌアリバメの洞窟
⑤	雷の神ヌアリバメに延命を請うが、ヌアリバメはロバビーダスが遣わされた理由がわからず、ニウェツィカ神に尋ね、ニウェツィカがシュラウェにその理由を告げる場面。
	シャパウイイエメカの家
⑥	シュラウェは、南の湖島でナカウェに命乞いをしたが、彼が一度も供物を捧げにこなかったことを理由に頼みを断られる場面。ナカウェは南で天を支える蠍燭を守る神である。
⑦	母なる海アラマラ
	西の太平洋で天を支える蠍燭を守る、健康と生命の女神アラマラに延命を願い出る場面。
⑧	トゥーリキエ(Tiirkie)の山
	シュラウェが、オオカミの姿をした兄たるツアムラウイ神に命乞いをする場面。
⑨	兄たるウトゥタウイの棲家
	シュラウェが、鹿の主、兄たるウトゥタウイ神に延命を願い出る場面。
	アウシャマナカの山
⑩	ナカウェが造ったアウシャマナカ山の神であるアウシャテマイに延命を懇願する場面。アウシャテマイは、北で天体を支える蠍燭を守る神である。
	タティキエの教会
⑪	サン・アンドレス(San Andréz)に位置する、タナナマ神が奉られた教会で、シュラウェがタナナマ神に、ウイリクータから天界バリテクアに上るように告げられる場面。
	バリテクア
⑫	天界バリテクアで、タナナマ神がシュラウェの生前の罪深い行いに言及し、地獄行きを決定する場面。タナナマ神は、生命の枝を見て、シュラウェの命が尽きることを確認する。
	母なるケヴィムカの家
⑬	シュラウェが、西の光の地方にいるシカの主、ケヴィムカ神に救いを求める場面。
	マクシェテ
⑭	シュラウェが生前好色者であったことを忘れぬように、マクシェテと呼ばれる平原で、ロバビーダスがシュラウェの顔に顔料を塗り、刺繡で飾った美しい衣装を着せる場面。
	テテユアウェクア
⑮	光の世界と闇の世界を隔てる境界、テテユアウェクアで、ロバビーダスが闇の支配者にシュラウェを引き渡す場面。

### 第2部 シュラウェは地獄に下り、悪行の罰を受ける

	闇の地方
⑯	闇の支配者の命令で、シュラウェがバイオリンを弾き、石の上で飛び跳ね、地獄行きを死者たちに告げる場面。
	洗礼
⑰	シュラウェが、火にかけられた五つの釜(洗礼盤)に漬けられる場面。
	母たるトウモロコシ、ククル(Kukuru)
⑱	シュラウェが、ふつうの水を粗末にしていたため、トウモロコシの神に、虫がたくさん入った汚い水を飲まされる場面。

	<b>聖なる谷ウクタピパ(Hukutapipa)</b>
⑯	シュラウェが、闇の支配者にマツの木に縛られ、用もないのに木の皮をむしったという廉で、木に復讐される場面。
⑰	<b>オポッサムの母</b>
⑱	シュラウェに殺されたオポッサムの母に、シュラウェが岩を落とされ潰される場面。
⑲	<b>崖</b>
⑳	シュラウェが、生前意味もなく投げ捨てた石を、一つ一つ担いで元の場所に戻すという場面。
㉑	<b>母たるナレマ</b>
㉒	ナレマが、好色者であるシュラウェを灰にするために、巨大で白熱した陰部に、彼を迎える場面。ここでは、生前5人以上愛人を持ったものが、罰せられる。
㉓	<b>棺</b>
㉔	シュラウェが、他部族の女性と関係をもった罪で、とげと岩屑と汚物の入った大きな匂いに入れられ、様々な動物に噛まれ、踏まれる場面。
㉕	<b>カラスの母</b>
㉖	生前、シュラウェがいじめた子ガラスが苛めたトルティージャを焼いており、シュラウェが、その母ガラスにトルティージャを乞う場面。
㉗	<b>クイエウェウリカ(Kiyeweuriaka)川</b>
㉘	シュラウェは、生前いじめた犬に襲われるが、トルティージャを与え、熱湯のサン・ペドロの川を黒犬トシウバ(Tixi'iwa)に渡してもらう場面。
㉙	<b>イチジクの木</b>
㉚	川の反対岸で、5本に枝分かれしたイチジクの木をめがけて、シュラウェが石を投げる場面。生前の愛人の数だけ石を投げ、残った石を木の傍らに積んでおく。
㉛	<b>ネイラタ</b>
㉜	生前、不真面目に祭りに参加していた罪で、死者たちの踊りの輪に、シュラウェが加えられ、踊りつけなければならなくなる場面。死者の旅の最終地である。

### 第3部 シュラウェはもう一度、生者の世界に上がり、家族に別れを告げる

	<b>シュラウェとの別れの儀式の準備</b>
㉚	死後5日目に、シュラウェの義理の父フェリペ(Felipe)や妻トマサ(Tomasa)などが、別れの儀式を執り行うために、準備をし、マラアカメと話し合う場面。
	<b>別れの儀式の開始</b>
㉛	村人が焚き火の周りに集まり、マラアカメを中心に、別れの儀式の準備をする場面。マラアカメは、人間と神の仲介者であるカウユマリエにシュラウェを探すように依頼する。
	<b>シュラウェ探し</b>
㉜	カウユマリエが、南のナカウェ神や西のアラマラ神など、基本四方位の神々やタナナマ神のところをたずね、シュラウェを探しまわる場面。
	<b>アルディージャ農園にカウユマリエが戻る</b>
㉝	カウユマリエがシュラウェを見つけることができぬまま、村に帰り、マラアカメと話した後、創造神である太陽神に助けを請い、トウモロコシの神、ニウェツィカと話す場面。
	<b>カウユマリエがシュラウェ探しをはじめる</b>
㉞	カウユマリエが、闇への入り口テテュアウェクアで、闇の支配者にシュラウェが来たかどうかを聞き、シュラウェが闇の世界へ入っていったことを確認し、闇の世界へシュラウェを探しに
	<b>カウユマリエがネイラタに下る</b>
㉟	カウユマリエが、ネイラタに降りていく途中、シュラウェを罰した神々と出会い、最後にネイラタでシュラウェと会う場面。
	<b>テテュアウェクアへ戻る</b>
㉟	カウユマリエが、ワシの姿になりシュラウェをつかみ、テテュアウェクアまで飛んでいき、闇の支配者と話し合い、その後シュラウェの家を目指す場面。
	<b>シュラウェとの最終的な分かれ</b>
㉩	カウユマリエに連れられて、シュラウェが村に帰って来て、家族に挨拶を告げ、テテュアウェクアのほうへ帰っていく場面。